

千葉市内縄文時代遺跡表採の玉

西野 雅人・小林 清隆

1. はじめに

平成4年に千葉県文化財センターは玉とその生産の研究を中心とした『研究紀要13』（註1）を刊行した。そのころ、千葉市内に住む浅野浩明氏から、千葉市六通貝塚と同市誉田高田貝塚で採集した縄文時代の玉をお借りすることができたが、入稿後であったため取り上げられなかった。そこで、本誌上で両遺跡の計7点の玉を紹介したい。

2. 千葉市六通貝塚

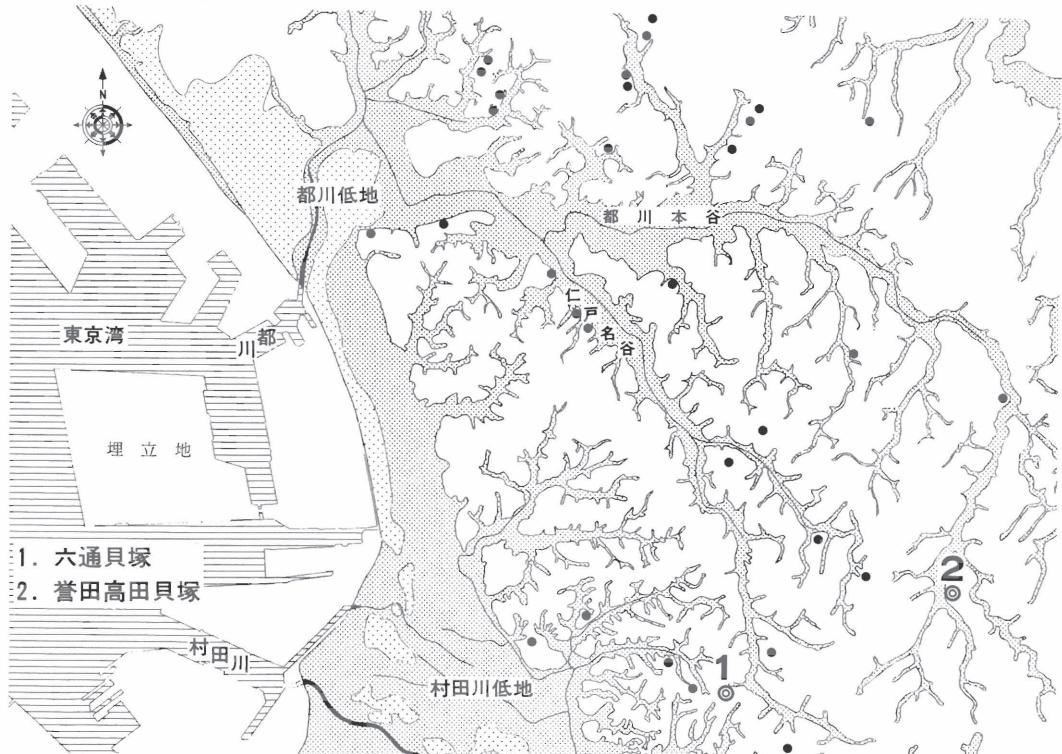
六通貝塚は、JR外房線鎌取駅の南約1.5kmの千葉市緑区小金沢町にある縄文時代中期から晩期の「拠点集落」である。ボーリング調査によって貝層の分布は東西約140m、南北125mの馬蹄形をしていることがわかっている（註2）。貝層の幅は50～70mほどもあり、表面積は加曾利南貝塚に匹敵する。

貝層の厚さも1m以上におよぶところもあるので、体積も非常に大きなものであろう。

本遺跡の立地する村田川右岸は、小金沢貝塚・木戸作貝塚・森台貝塚・上赤塚貝塚・大膳野南貝塚といった後期の貝塚集落が集中する場所として有名である。六通貝塚はこの貝塚群のなかでも、もっとも貝層が大規模であり、集落の継続期間も中期から晩期までといちばん長い。3回の発掘調査の報告は未刊行ながら、これまでの調査によると、石棒・石剣・独鈷石・異形台付土器など祭祀的な遺物が多い。また、貝層では獣骨がきわめて多く、人骨や小児甕棺も発見されている。

3. 千葉市誉田高田貝塚

誉田高田貝塚は外房線誉田駅の北方約2.3kmにあり、幅10～20m・長さ100mほどの弧状の貝層を



第1図 都川と村田川流域の縄文後期貝塚 (1:100,000)

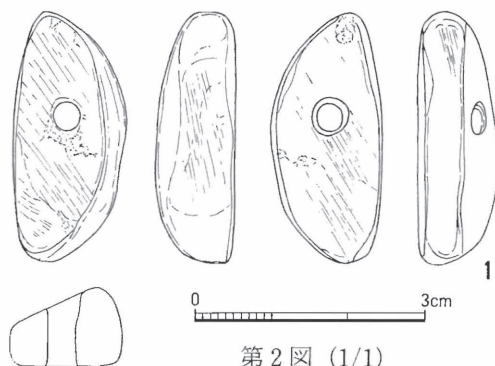
もつ後期の「拠点集落」である。同じ後期の大規模な貝塚が20以上ある都川流域の遺跡群のなかで、もっとも谷奥の集落であり、しかも鹹水産の貝がほとんどであることで古くから注目されていた。

貝層や集落は、2度の発掘とボーリング調査によってかなり実態が解明されている(註3)。それによると、集落の時期は後期・堀之内式から晩期・安行式であり、堀之内式から後期安行式の住居跡が著しく重複した場所がある。また、住居跡の空白区から多数の人骨が発見されており、「墓域」が意識されていた可能性も指摘されている。

4. 六通貝塚表採の玉(1・2)

1 ヒスイ製の玉で完全な形をたもっている。長さ32.6mm、幅14.3mm、厚さ10.6mm、重さは7.43gである。嚢節状の形状につくられており、大珠といっていいであろうが、研究者によっては垂玉とよぶ人もおられるであろう(註4)。

現状ではやや透明感に欠ける緑色の硬玉を整形・研磨し、中心をずらして孔を穿っている。孔縁は両側とも丁寧に仕上げられ、片側からの穿孔であったとみられるものの、途中にわずかの孔径の違いがあることから、両側から穿孔した可能性も考えられる。その中心部の孔径は3.4mmである。研磨は全面におよぶが、作業によって生じた擦痕がそのまま残っているので、最終的な仕上げ研磨が行われず成品となったものとみられる。



第2図(1/1)

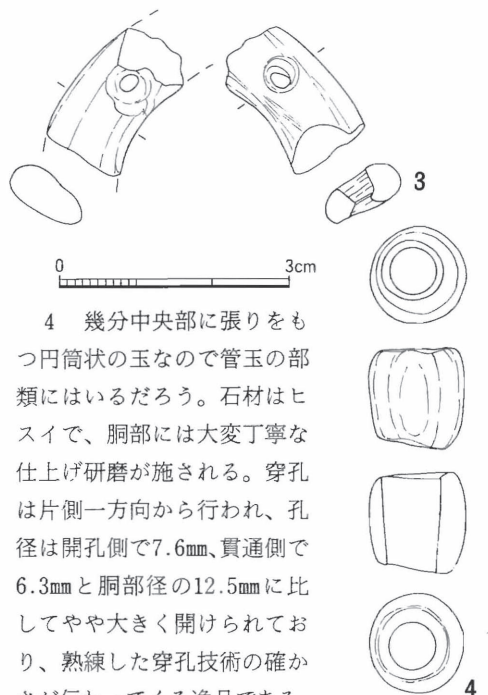
2 光沢をもつ真つ黒な色調の丸玉である。石材は黒色頁岩であろう。形状はまったくの球ではなく、断面形が球を押し潰したような楕円の形となるものである。全体に入念な研磨が施されるが、偏平面に微弱な稜が認められる。穿

孔は両側から行われており、ほぼ中心部で貫かれている。孔壁は穿孔痕跡を残す部分と、それが消えて見えなくなっている部分とがある。大きさは、径9mmから9.2mm、厚さ5.9mmで、重さ0.76gである。

5. 菅田高田貝塚表採の玉(3~7)

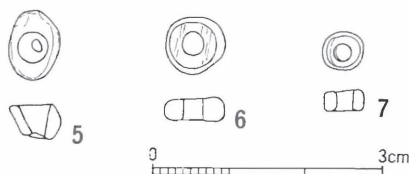
3 断面形態が楕円形につくられた弧状成品の欠損品である。両端に破断面があり、両方にさらに続いていたことがわかる。完形の成品を類推すれば球状耳飾が想起され、その一部と考えてよいであろう。

本品には一か所に孔がある。これは耳飾として機能していた間に何らかの要因で破損し、それに対して穿った補修孔と判断されよう。補修孔は両側から開けられ、孔壁に穿孔痕跡がみられる。球状耳飾は、多くの出土品が示すように、欠損すると破断面に調整を加え、垂飾につくりかえる例がある。本品は破断面に研磨を認めることができないので、垂飾に転用したものが壊れたと判断することはできないし、また耳飾として割れたものなのか、またその後の欠損なのかも特定はできない。石材は球状耳飾の原材として一般的である滑石である。遺存部の幅は10.5mm、厚さ5.5mmである。



4 幾分中央部に張りをもつ円筒状の玉なので管玉の部類にはいるだろう。石材はヒスイで、胴部には大変丁寧な仕上げ研磨が施される。穿孔は片側一方向から行われ、孔径は開孔側で7.6mm、貫通側で6.3mmと胴部径の12.5mmに比してやや大きく開けられており、熟練した穿孔技術の確かさが伝わってくる逸品である。長さは13.4mmで、重さは2.78

第3図(1/1)



第4図 (1/1)

gである。

5 孔をもつ面を略楕円形に整形した小珠である。この1点が単独で垂玉として用いられていたのではなく、おそらく複数の成品を紐にとおして一つの装身具を成り立たせていたと考えられる。このような小型で連珠を構成する玉は、形態的なバリエーションがありすぎ、小珠(小玉)として一括されて、特定の名称がない状況が続いている。ここでも適切なよび名が浮かばないので、一応小珠とっておくことにする。

本例は緑色が混ざる透明感のある白色を基調とした硬玉を原材とする。楕円形に整えられたそのほぼ中央に片側から穿孔を行い、貫通側に孔整形の研磨が加えられている。孔の断面形が開孔部から貫通側にすぼまっていく逆円錐状であることから、先端が尖る工具で作業したことが推測される。長さ9.0mm、幅6.5mm、厚さ5.0mm、重さ0.47gである。

6 完存する白玉である。古墳時代の石製模造品にある白玉と形状のうえで大差がないので、白玉とよんで差支えないだろう。異なる点といえば、側面にわずかの丸さをもつところであろうか。これもまた単独の用いられ方でなく、連珠をなしていた1点であったと考えられる。

石材は、灰緑色が強く透明感がないものの、油脂光沢を放っている滑石が使用される。この滑石には黒色の斑点がみられ、また表面を撫でると、中に含まれる磁鉄鉱の結晶(註5)に原因する微妙な引っ掛かりを皮膚に感じる。

大きさは径が7.2mm×7.4mm、厚さ3.5mmになり、穿孔は一方から行われている。孔壁に穿孔痕は残存しない。重さは0.36gである。

7 透明感があり、うすい緑色の色調を放つ石材を用いた白玉様の小珠である。爪では傷がつかず、かなり硬質なのでヒスイの可能性が高い。径は5.4mmと小さく、両側から穿孔されている様子が認められる。厚さは2.9mm、重さは0.13gである。

6. 資料についての所見

県内の縄文時代の玉類の出土状況は、遺構から土器を共伴して出土する場合がまれで、これまで報告されている資料も、大部分が単独出土であったり、表採によるものである。またさまざまな資料的制約からか、いまだ玉自体の編年にはふれていない。しかし、狭くみても東日本に展開する玉類を含めた、各種装身具の盛衰の動向と軌を一にし、そこから大きく逸脱するあり方ではないといえるだろう。その動向にてらせば、3の球状耳飾りは前期から中期の間につくらたと考えられるし、1の大珠は中期から後期の初頭に位置づけられ、ほかの玉類は、連珠式の装身具が盛行する後期から晩期に用いられたと判断される。また、その生産地を推測すれば、1の大珠は硬玉を産出する新潟県から富山県にかけての攻玉遺跡が最有力地であり、そこからもたらされたものと考えられる。しかしそのほかについては、原材の産出地の遠近を問わず、生産地域の絞り込みは困難である。それは後期から晩期にかけて本県においても攻玉遺跡が確認されているように、連珠式の装身具の普及が、必然的に生産地の拡散をもたらしたためである。県内では6か所の攻玉遺跡が確認され、印西町天神台貝塚、八千代市神野貝塚、佐倉市神楽場遺跡、銚子市余山貝塚ではヒスイの玉類の生産が確認されているし、滑石製の玉類が市原市武士遺跡、大多喜町堀之内上の台遺跡でつくられている(註6)。

後期から晩期の連珠の普及は生産地の拡散をうながしたが、また石材の多様化を進めている。今回紹介した玉の石材を挙げても、ヒスイ(硬玉)、滑石、黒色頁岩があり、そのへんの事情を示している。そして、一方では多量に生産しなければならない状況に対応するため、生産性にすぐれた石材の選択をも迫られたと考えられる。前期に盛行した球状耳飾の原材として盛んに使用されていた滑石を、ふたたび玉の原材として選択したことの第一義的理由もそこ、すなわち滑石が見た目の美しさと、生産性の優位性に見合ったからにほかならないであろう。このような生産のあり方が各地におこったと想像され、紹介資料の供給もとの推定を一層難しくするわけだが、6に示した白玉の類例が出土しているの、それについて次に紹介しておくことにしよう。

6の白玉の原材である滑石は、黒色の斑点が観察される点と、磁鉄鉱の結晶を含むという視覚的特徴を有している。この特徴をもつ滑石は、武士遺跡の白玉や未成品(筆者実見)、堀之内上の台遺跡の成品(実見)や剝片(筆者表採)に存在する。また、四街道市御山-1遺跡の土坑から出土した372点の白玉(註7)が、肉眼観察のうえからは大変近似した質感がある。ちなみにその帰属時期は御山例が荒海期に属し、ほかの2遺跡も晩期に比定されている。

ところで、今回紹介した玉は、表採資料でありながら7点とも遺跡のどのあたりで採集したかが記憶されており、平面的な分布の傾向を知ることができた。とくに、菅田高田貝塚では浅野氏の表採品や地主の方の話から、玉が表採できるのは弧状貝層の内側にほぼ限られている。その辺りは後期後葉から晩期の土器が集中する範囲と一致しているため、玉の分布は時期的な傾向を示している可能性が高い。また、前にふれた「墓域」との関係も考えられる。県内で発見された玉の多くが表採によるものであることを考えれば、玉の遺棄または廃棄の意味を考えるうえで、表採地点の記録はとても重要なデータといえるであろう。

今回、このような検討が可能となったのは、玉を採集した浅野氏のひたむきな活動のおかげである。西野は、これまでも遺跡の破壊や盗掘の情報、分布地図にのっていない遺跡の発見などを教えてもらってきた。ここでお礼を述べるとともに、成果の報告の約束をなかなか果たせないうことをお詫びしたい。浅野氏の活動が、千葉市内の遺跡の保護や研究に活かせるよう努力したいと思う。

註・参考文献

- 1 (財)千葉県文化財センター 『研究紀要13』 1992
- 2 宮城孝之 「六通貝塚貝層範囲確認調査」

『研究連絡誌』18 (財)千葉県文化財センター 1986

- 3 出口雅人 『千葉市菅田高田貝塚確認調査報告書』 千葉県教育委員会 1991
- 4 八幡一郎氏は「硬玉製大珠の問題」において、大きさについてふれ、「おおむね三センチ以上の大型品」を「硬玉製大珠またはたんに大珠と呼ぶ」と定義し、安藤文一氏は、便宜的に長さ5から10cmを小形品、10から15cmを中形品、15cm前後からそれ以上を大形品と分類し、藤田富士夫氏は、「長さが5~15cmほどの大型飾玉」を硬玉製大珠というといっている。また、硬玉の原材の産出地に隣接する硬玉の攻玉遺跡である富山県境A遺跡の報告では、「全長40mmの目安に、これ以上の大きさのものを大珠」にしている。
したがって、形態による分類は基本的に八幡一郎氏に準じていても、大きさによる基準となると必ずしも一致をみていない状況が認められる。本例は八幡氏にしたがいが、取りあえず大珠といっておきたい。
- 八幡一郎 「硬玉製大珠の問題」 『考古学雑誌』30-5 1940
- 安藤文一 「翡翠大珠」 『縄文文化の研究』9 雄山閣出版株式会社 1983
- 藤田富士夫 『玉』 考古学ライブラリー52 ニュー・サイエンス社 1989
- 山本正敏 『境A遺跡 石器編』 富山県教育委員会 1990
- 5 高橋直樹 「千葉県内から出土する玉類の原材の原産地についての予察」 『研究紀要』13 (財)千葉県文化財センター 1992
- 6 小林清隆 「旧石器~縄文時代の玉」 『研究紀要13』 (財)千葉県文化財センター 1992
- 7 前掲註6に同じ。なお、御山-1遺跡の報告書は平成6年3月に刊行の予定となっている。

(小林 現職 財団法人山武郡市文化財センター)